

Title	アングロノルマン研究 -フランス語教本およびアングロノルマン文学-
Author(s)	福井, 秀加
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3104944
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	福井秀加
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 1 1 9 8 2 号
学位授与年月日	平成 7 年 5 月 1 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	アングロノルマン研究 —フランス語教本およびアングロノルマン文学—
論文審査委員	(主査) 教授 大高 順雄 (副査) 教授 岡野 輝男 教授 藤田 實 教授 今井 光規

論文内容の要旨

歴史上の区分によれば Anglo-Norman England という名称を使用し得るのはノルマン征服以降、ノルマン王朝の終わり 1154年までの 100年に満たぬ期間であるかもしれない。しかし、アングロノルマン文学の歴史という立場をとればアングロノルマン文学の開花はヘンリーI世の時代である。アンジュー王朝にその最盛期を迎え、文学作品の創造は15世紀初頭にまで続く。15世紀に至るまでイングランドにおいて用いられた島嶼語 Insular Language である、フランス語を総称してアングロノルマン語 (Anglo-Norman) という。ウィリアム征服王に従って海を渡りイングランドに居を定めたノルマン人たちおよび為政者達は母国語を用いて政治的文化的活動を行った。フランス語すなわち AN による最初の叙情詩、典礼劇、聖書の翻訳、聖者伝、歴史書、年報、武勲詩、叙事詩、説教集など多彩な作品が大陸フランスに先駆けて作成されている。

アングロノルマン文学ないし文明がもたらした真の価値はノルマンディとの交流を通じて、イングランドは大陸との緊密な関係を保ち、中世全期に亘り地中海文明との交渉を維持することができたということである。アングロノルマン文学は互いに離れて存在していた二つの国、イングランドとフランスとが人種的障害を越えて活発な知的交流を行う媒体となった。

イギリスに到着したノルマン人の子孫は安定した社会的、文学的條件のもとでかつては敵対していたアングロサクソンの英雄や事蹟をほめ讃え始めた。Roland や Olivier と同様にサクソンの Gui de Warewic や Bueve de Hantone などの名が語りつがれ、アングロノルマンの韻文ロマンスはやがて中世英語のロマンスに翻案され、イングランドは古典古代文明との接触もアングロノルマンの物語を介してなし得たのである。またアングロサクソン時代には深い霧の中に包まれていたケルトの素材もアングロノルマン文学の題材となり、アーサーと円卓の騎士たちは西ヨーロッパの舞台へアングロノルマン語を媒介にして登場した。

ノルマンの詩人 Wace は *Roman de Brut* において威厳にみちてはいるが鷹揚で酒脱な味のあるアーサー王を描き出した。この王にしてこの臣下あり、とアーサー王の臣將たちも喜怒哀楽の微妙な心理の綾をのぞかせ、人間味溢れる忘れ難い人物像である。家臣たちは空威張もするが、同僚互いにかからうことを楽しんでいる。所謂 Norman Gaiety と

よぶことのできる明るさ、軽妙さが Wace の *Roman de Brut* を翻案した Layamon の *Brut* との比較によって一層明らかに浮かび上がってくる。複雑な心理を描写する技法はまさにアングロノルマン文学によって中世英文学の作品の中に紹介されていったと言えるであろう。

アングロノルマン *Amys* と *Amillyoun* と ME *Amys and Amylion* における二人の若者は新しい型の叙事詩の主人公となった。イングランドの貴族社会の中で荒々しい戦う戦士たちの雰囲気は和らげられ、この物語はいにしへの英雄詩、武勲詩とロマンスの騎士道物語の橋渡しとなる文化嗜好変遷期 *acculturation* の作品の様相を示した。封建時代の主君に忠誠心をもって仕える物語の主人公アミとアミロンは互いにたぐい稀なる友情を抱き、二人の愛情は自己を滅却するほどに堅固なものであった。ここには個人の自由意志において愛情を貫き通す生身の人間の心が動いている。

準典礼劇の傑作、フランス語による最も古い宗教劇の一つ「アダム劇」にもアングロノルマン語の特徴が認められる。Tours の市立図書館に MS927 として現存する単一写本に記された「アダム劇」の原典がアングロノルマン語で書かれてあったろうとは諸学者の見解であるし、それが12世紀半ばに作成されていたろうということも大方一致している。作者は僧職にあったに違いないが彼は当時の観衆が大いに関心を持ったであろう人物を描写し、人々の生活に浸透した事柄を巧みに把えて、人類の歴史の始まりという厳粛で膨大な背景の中に移し入れた。現実と神話が密接に凝縮された想像の世界で人間の始祖アダムとエヴァは人間味豊かな優しさや哀しさを、そして頼りなさを観劇する者の心に訴え、墮獄の罪を犯した彼等ではあるが、我々はアダムとエヴァに同情を禁じ得ないのである。二人を誘惑する悪魔さえも滑稽で失笑を買い、心底憎めぬ登場人物である。アングロノルマンの作品の数々はその文学作品を共有した人々の心を豊かにし、想像力を刺激して、英仏海峡をへだてた両国に広がり、愉しんで読まれ、また聴かれたに違いない。アングロノルマン文学作品はこれらを翻案した中世イギリス文学に深い影響を与えただけではなく大陸における中世フランス文学の成熟発展にも大いに貢献したことはないむべくもない事実であろう。

さてそれでは、このようにそれぞれ魅力を湛えたアングロノルマンの作品を生み出した言語、アングロノルマン語とはどのような言語であろうか。ノルマン征服の結果、イングランドの支配階級の多数がフランス大陸よりの移住者となったために、フランス語は貴族の宮廷用語であっただけでなくイングランドを統治するための法律用語となり、また民衆に対しては裁判の用語ともなっていた。こうしてフランス語の使用（最初は主としてノルマンディ方言）は急速に広まったのである。それは時代の要請であったのだ。ノルマン王朝成立以後の英国で用いられ続けたフランス語は大陸フランス語と異なる発達をとげるので、これを *Anglo-Norman* とよぶ。この言語に対して中世では種々の名称があった。即ち、*Gallicana*, *Lingua Romanica*, *Idioma Gallicum*, *Franceis* などである。AN はノルマンディ方言が主に基盤となって英語の影響も受けつつイングランドにおいて15世紀に至るまで用いられ続け、*Insular French* となったのである。*Anglo-Norman Text Society* が1937年 Oxford 大学に基盤をおいて設立され、以後アングロノルマン語という名称が広く用いられるようになった。*Anglo-Norman Dictionary* (7巻) は1992年に完成している。

12世紀も半ばを過ぎると都市の商業は盛んとなって、ノルマンディの Rouen や Caen に生まれた者もロンドンに定住するようになり、アングロノルマン語は商業界の用語となった。学校ではフランス語の教育が行われ、イギリス人も上流社会の連中はアングロノルマン語で手紙を書いた。アングロノルマン語は祈禱や讚美歌にも用いられた。AN、ラテン語、英語を混用した祈禱文も残っている。12世紀末にイギリスで文章活動を行いロマンスの *Ipomedon* を作成した Hue de Roteland は物語の冒頭でこう言った。「ラテン語で書くと翻訳しなければ人々は理解しない。だから私はロマンス語で話そう…」と。彼の言うロマンス語とはイギリスにおいて書かれた特徴をもったアングロノルマン語のことである。Roteland の *Ipomedon* には、例えば *que* にかわる *ke*, *a* の古形の *ad*, *mais* にかわる *mes* (AN においては一時期以後、*ai* と *ε* が無差別に用いられた), *chevalers* (特に接尾語 *-ariu* に由来する二重母音 [je] は AN で [e] となった), *le rey* (OF *roi* 二重母音 *ei* は大陸フランス語のような *ei > oi* という変化を生ぜず *ei* のまま残った) など AN の特徴が現れている。F.J. Tanqueray が集録した *Recueil de lettres anglo-françaises* (1265-1399) には164通の書簡が収められているが、それらの中にはイギリス人 John Peckam (カンタベリー大司教) や Walter de Bibbesworth のアングロノルマン語による手紙が紹介されている。

このようにしてイギリスに広まっていったアングロノルマン語、また、アングロノルマン文学は13世紀半ばにしてその最盛期に達するのであるが、ANはしかし大陸フランス語(francien)との劈開を深めていった。対岸のフランスでは13世紀に当時のイングランドで用いられていたフランス語、実はAN、を揶揄した作品が既に現れている。フェブリオの「二人のイギリス人と羊」や狡猾な狐ルナールがイギリスの旅芸人を装う「狐物語」の一節がある。いずれにも滑稽なアングロノルマン語が誇張されて描かれている。

13世紀半ばを過ぎると、フランス本土との社会的関係の変動もあってイングランドにおけるアングロノルマン語は世代から世代へと受け継がれた生きた言語ではなくなってくる。しかし方言の多種多様であったイギリスにおいてフランス語は便利な共通語として用いられ続けたのではあったが、最早それは母語ではなく習得されねばならぬ言語となっていた。14世紀になるとフランス語の学習が奨励された。Oxfordの、例えばQueen's Collegeの学寮では学生たちにラテン語かフランス語で絶えず会話するようにと言い渡してあったということである。

正しいフランス語を学習させることを目的として、13世紀後半から14世紀にかけてフランス語教本が数多く作成される。Walter de BibbesworthがDionysia de Mountchensy夫人に献上した教本(Tretiz)も現在16写本によって伝来する。手際よく纏められたフランス語教本としては最も古いものであろう。13世紀末の作成である。中世の領主邸で家政をとりしめる夫人が知っておくべき実用のフランス語の教本という事であって、内容は邸の内外の日常生活に関するフランス語である。言葉の単数、複数、フランス語の性別、それにかかわる冠詞、所有代名詞などの基本を身体の部分に関する具体例を示しながらまず教え、次いで農作業に用いるフランス語、糸つむぎ、ビールの醸造、家を建てる手順、小鳥、獣の名前、その習性、池や川での魚釣、はては館での宴会の御馳走と楽しみながら学習させてフランス語を覚えさせようとの作者の意図が窺われる。Bibbesworthの教本の特徴は同音異義語を多く教えようとするところである。彼は口調よく8音節で韻をふみながら homonyms を並べ、例えば *lalevere* (*lippe* と英語彙が単語の上に記してある) と *le levere* (*pe hare*) *la livere* (*pe pount*) と *le livere* (*bock*) を区別する。意味の違いを教えるだけでなく、曖昧な発音および綴りからくる混乱を防ごうとしたのであろうが、興味深いことにはBibbesworthが正しく教えようとしてとり上げたこのような言葉の中に、アングロノルマン語の特徴があらわれているのである。唇の *la levre* には 'vr' に渡り音の e が挿入されて *levere* となっており、野兎の *le lievre* にも同様に渡り音 e が挿入されている。更に、二重母音 *ie* はアングロノルマンの顕著な特徴である *je* の水平化 [*je > e*] によって e が野兎 *le levere* の綴りにあらわれている。英語の音体系において子音後に *j* の現れることが稀であったということも原因であったのかANにおいてこの変化 *ie > e* は大いに促進され、この現象は12世紀後半以後ANの際立った特徴の一つとなるのである。貨幣単位のリーヴルにも本を意味する *livre* にも *la livere*, *le livere* と渡り音 'e' が書かれている。このようにBibbesworthの教える正しいフランス語としてこれらの言葉を用いると、当時の大陸フランス語とは違った言葉、発音を覚えることになる。Chaucerが「カンタベリー物語」において多少からかい気味に紹介した貴婦人然とした尼僧院長もStratford atte Bowe 仕込みのこのようなフランス語(AN)を学習したのであろう。

最も普及したフランス語教本は、14世紀前半に作成されたと見做される *Orthographia Gallica* 「ガリア語正綴法」である。ラテン語をもってフランス語の綴り方、発音、複数の作り方、動詞の人称変化、活用、前置詞、代名詞、形容詞、副詞の扱い方を説明する。大陸フランスに先駆けて作成されたフランス語文法教本と言えるであろう。パリの学生T.Hと称する者がこの *Orthographia Gallica* より多少早い時期に正綴論を書き上げている。この中には *Romanici*, *Britannici*, *Anglii* が *avoir* の未来形 *avra* を書くとき語中に e を添えて *averay*, *j'averay* と書く、とANにおける渡り音の綴りが指摘されているが、フランス語の綴り *q* のかわりに *k* と書いてもよいとしているのは *que* のかわりに *ke* を使用する習慣のあったANの綴りを認めていることになる。このT.Hの作成した *Tractatus Orthographiae* を14世紀後半にオルレ안의民法と司法両博士、司教座聖堂参事会員M.T.Coyfurellyが更に詳しく書き改めて世に出した *Orthographie Gallicane* の文法説明にもアングロノルマンの特徴が示されている。英語の音体系に存在しなかった硬口蓋子音 [ŋ] はANでは早い時期に [n] となり始めるのでCoyfurellyは例えば、*bosoigne* という語をとりあげると *bozoyne*, *bosoinne*, *bosuine* と異形の多様性を示すのである。*compaignon* については特に、ガリア人は語中に *n* を挿入して *compaignon*, *compaignie* と書くこと記しているがこれも [ŋ] 音を表記しようとした綴りである。14

世紀の後半 Oxford には secretarial work を学ぶコースがあり、Thomas Sampson という教師がその課程を指導していたと言われるが、*Orthographia Gallica* は彼の学習教本としてくりかえし用いられていたようである。筆者の論文中に掲載されてある BL MS Harley4971 に書き写されている *Orthographia Gallica* は Sampson の講義 に用いられた比較的早い時期のテキストの写しと見做される。Sampson はまた契約書や特許状の模範文に加え多種多様の書簡範例を作成し、教本として使用した。BL MS Harley 3988 に残されている書簡範例（論文に一部分を facsimile にて掲載）は 15 世紀に書き写されたものであろうが MS Harley4971 に挙げられてある書簡範例文と同文のものも多い。Sampson の講座に使用されたフランス語教本は 15 世紀に至るまで連綿と受けつがれていったということである。筆者の翻訳した *La Manière de Langage* (MS Harley3988 1' - 26' [翻訳は 1' - 16' まで]) も、それに続いて書き写されている書簡例に 1396 年 5 月 29 日と書かれてあることや Oxford の Sampson の講座が business training であったことを考え合わせると作者不明の *La Manière* であるが、あるいは Sampson の教材の一部であったかとも考え得る。Ci comence la maniere de langage que t'enseignera bien a droit parler et escrire doulz francois selon l'usage et la coustume de France (1') と、この Manière は始まっている。

そのほか、フランス語教本としてはフランス語を上手に話し、礼儀正しく振舞うようにと父親が息子にさとす礼節を教える種類のものもある。Treatise on Courtesy (*Urbain le Courtois* という名称) である。*Femina* とよばれる教本は母親が幼い子供にフランス語を美しく話す言葉遣いを教えるものであり、写本は 15 世紀の成立と考えられるがこの教本は Bibbesworth の *Tretiz* を書き写し、更に *Urbain le Courtois* の一部を加え、権威をつけるために Dionysius Cato の対句集やソロモンの箴言、セネカの処世訓から格言を引用している。ビブズワスの *Tretiz* と同様の AN の特徴をそのままに伝えているところが多く、両者の緻密な比較は今後の課題であろう。Cambridge MS B 14 - 40 に収められている *Femina* の edition は 1909 年以後筆者が翻字するまであらわれていない。Explicit *Femina nova* と *Femina* の叙述が終わると、次葉より数詞、代名詞、動詞活用が記されてある。これは 4 世紀のラテン文法家 Aelius Donatus の手法を踏襲した文法篇で *Liber Donati* と名付けられているが筆者の知るところ、いまだ翻字されていないのでその Grammatical sections を転写し、異本と共に掲載する。

11 世紀後半より 15 世紀にいたるまで英国において用いられ、そして教えられてきたアングロノルマン語の顕著な特徴は次の諸点に要約することができるであろう。

- 1) 二重母音 [je] (<- ariu) は [e] となった。
- 2) 自由強勢音節において [e] は [ɛ] となり (ai, ay, e, ei, ey と綴られる) [w ɛ] (oi と綴られる) に進化しない。
- 3) 強勢音節の前ないし後における [e] は [i] となる。
- 4) 自由強勢音節における [o] (-u ないし -ou と綴られ、o と綴られることは少ない) は [u] となり [ø] (-eu と綴られる) に進化しない。
- 5) 円唇硬口蓋母音 [y] と [ø] は消失した。
- 6) [y] は [u] ないし [ju] となる。
- 7) 硬口蓋子音 [ŋ] と [ɳ] は消失し、それぞれ [n] と [l] になる。
- 8) 無音語末母音 [ə] (-e と綴る) はしばしば消失する。
- 9) 中英語においては語幹に強勢がおかれる。その影響によって語頭音節が脱落する場合がある。
- 10) 動詞不定法語尾 -ir が -er に吸収される。
- 11) 鼻母音の綴り an, on が aun, oun と綴られる。
- 12) K.W.Y の綴りが頻繁に現われる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、13世紀から15世紀までにイギリスにおいて成立したフランス語教本と文学作品とを対象として取り上げ、アングロノルマン語及び文学研究の成果を収めたものである。

使用された資料は、次の通りである。

A. フランス語教本：

パリの学生 T.H の *TRACTATUS ORTHOGRAPHIAE*, 作者不詳の *ORTHOGRAPHIA GALLICA* を始め, M.T. Coyfurelly の *TRACTATUS ORTOGRAPHIE GALLICANE*, Walter of Bibbesworth の *TRETIZ, TRETYZ, NORE – TURE, CURTESYES*, 作者未詳の *MANIERE DE LANGAGE*, 作者不明の書簡文範, 及び2編の語彙集 *FEMINA* と *LIBER DONATI* である。

B. アングロノルマン文学作品：

福井秀加著 *AMYS E AMILLYON* (BL.MS.ROYAL.12.C.xii, London, ANTS, 1990), アングロノルマン語の *IPOMEDON* と中英語の *IPOMADON*, Layamon の *BRUT*, Robert Wace の *ROMAN DE BRUT*, 並びに Walter of Bibbesworth に帰せられる *DYTEES* (BL.MS.ADD.46919, fol.92r – 93r) である。

福井秀加氏は、上記の膨大な資料の各々について詳細に検討を加え、各作品の写本を英国図書館において研究、本文の読みに基づいて、既存の版本を吟味し、歴史音韻論の立場から批判し、文献学的見解に基づき厳格に修正した。

更に同氏は、今日まで看過されていた Bibbesworth の未刊行写本 *TRETYS* (B.L.Add.46919, fol.2r – 14r) と *DYTEES* (fol.707 – 10) を、次いで *MANIERE DE LANGAGE* (All Souls Continuations MS.182,314r – 316r) と同時期の貴重な作品 *LIBER DONATI* (Cambridge, MS.B.14 – 40) を翻字した。

福井秀加氏は、上記の研究対象を時代順に調査し、文献学的方法によって各作品の言語的特質と全作品に共通する言語的特徴を解明し、更に、この言語の進化を辿り、それと大陸フランス語との音韻論的比較(例えば, [ju] – [y], [l'] – [l], [n'] – [n]) を行い、語形論的相違(例えば, ole – la, ceo – ce, river – riviere) を指示し、アングロノルマン語法(例えば, haut tems “grand tems”, par moment “pour le moment”) に意味論的解釈を与えた。加えるに、福井秀加氏は、アングロノルマン文学作品に関して、卓抜な知見を披露しつつ、イギリス文学に対するフランス文学の影響を指摘すると共に、11世紀末に成立した初期アングロノルマン語による劇作品 *JEU D'ADAM* の単一写本を翻字、邦訳を付して、解説を加えた。

ただ、同氏がフランス語教本の作者として重要な存在である John Barton について言及しなかったことは残念である。また、叙述にわずかではあるが一貫性を欠く場合がある。今後の課題として残されよう。

しかしながら、総体的に見れば、この論文は、アングロノルマン語及び文学の総合的研究として本邦最初の業績であり、既存の研究の成果を十分に咀嚼して取り入れ、新たな見解を随所に展開し、重要な未刊行写本を翻字し、この分野の研究に顕著な貢献をなし、今後の研究の基礎を作ったと言える。

このよう諸点から、本論文は、大阪大学博士(言語文化学)の学位請求論文として十分に価値のあるものである。